

2021年10月9日

2021年 ラウンド4 レース11 澤龍之介選手がポール・トゥ・ウィンで富士大会に続いて今季2勝目を達成

Formula Regional Japanese Championship (フォーミュラ・リージョナル・ジャパニーズ・チャンピオンシップ=FRJ) 2021のラウンド4、レース11決勝が10月9日(土)にスポーツランドSUGOで行われ、77号車の澤龍之介選手(D'station Racing)がポール・トゥ・ウィンで今季2勝目を飾りました。



レース10終了から約3時間半後に行われたレース11。ここでも路面はウェットコンディションで雨も降っていたことから、全車がレインタイヤを装着してグリッドにつきました。

レース10に続き再びポールポジションからスタートした澤選手は抜群のダッシュを決めて1コーナーを通過。そこから一気に後続を引き離し、1周回目が終わった時点で2番手につけていた45号車の大草りき選手(PONOS Racing)に対して、2.8秒の差をつけました。

一方、予選2でのアクシデントによりタイム計測ができず、最後尾からのスタートとなった28号車の古谷悠河選手(TOM'S YOUTH)は、スタート後、2コーナーをまわる時点でポジションを5つ上げると、4コーナーでも1台をオーバーテイクし、6番手に浮上。シリーズチャンピオンを争う8号車の三浦愛選手(ARTA F111/3)を射程圏内に捉えましたが、三浦選手も隙を見せない走りを披露し、2台のバトルはこう着状態となりました。

マスタークラスでは、レース10で優勝した7号車の畑享志選手(F111/3)がクラス4番手からスタートし、次々と前のマシンをオーバーテイク。3周目にクラストップに立つと、7周目には3号車の小川颯太選手(Sutekina Racing)も追い抜いて総合6番手に浮上。順調なペースで周回を重ねました。

トップを快走する澤選手は、8周目を終えた時点で2位に対して6.1秒のリードを築きましたが、後半になると大草選手も巻き返しを始め、その差を徐々に詰めていきました。そして16周目を終えたところで両者の差は2.5秒となりましたが、ここでレースの上限時間である25分に到達したため、17周回でチェッカーフラッグとなり、最後まで逃げ切った澤選手が今季2勝目を挙げました。2位には大草選手が入り、3位にはFRJ初参戦、11号車の太田格之進選手（Rn-sportsF111/3）が入りました。

マスタークラスは畑選手が総合6番手のままフィニッシュし、SUGO大会2連勝をマーク。クラス2位には今田信宏選手（JMS RACING with B-MAX）、3位には96号車のTAKUMI選手（B-MAX ENGINEERING FRJ）が入りました。

注目のシリーズチャンピオン争いでは、SUGO大会終了時点で古谷選手（205ポイント）、三浦選手（161ポイント）の2人に絞られ、12月に鈴鹿サーキットで行われるラウンド5で今季の王者が決定することになります。

・レース11 優勝 澤龍之介選手コメント

「前回の富士大会と同様に勝って終わることができて、本当に良かったです。スッキリした気持ちで帰ることができます！僕の方がレースの序盤では速いセットアップだったと思うのですが、後半に厳しくなり始めて、大草選手も詰めてきていたのでプレッシャーはありました。最後の方はピットと小まめにやりとりをしながら、残り周回数や残り時間を教えてもらいながら走っていました。でも、何とか持ち堪えてトップチェッカーを受けることができました。また今回はマネージングディレクターの藤井誠暢さんが現場に来られなくてリモートでのやりとりになったのですが、レース10が終わった直後に電話をいただき、雨の時の走り方やコースのポイントを教えていただきました。それが2レース目はすごく活きたと思います」

・レース11 マスタークラス優勝 畑享志選手コメント

「クラッチの調子が良くなかったので、スタートは半ば諦めて、レース中に追い上げていこうと思っていましたが、1周目の2コーナーまでに何台か抜けました。ただ、レース後半はタイヤが苦しくなってきた、特に終盤には小川選手に迫られましたけど、なんとかポジションを守ることができました。マスタークラスのチャンピオンの可能性も出てきたので、次の鈴鹿も頑張ります」

以上